ヤリマンボウの幼魚*

Juvenile of the Pointed-Tailed Ocean Sunfish, *Masturus Lanceolatus*

矢 部 博 H. YABE

(南海区水産研究所油津支所)

The author described morphologically in the main the seven juveniles of Pointed-tailed Ocean Sunfish, *Masturus lanceolatus*, 22.5~77.5 mm in body length without caudal fin, found in the stomach of Seerfish, *Acanthocybium solandri*, caught off the Minamidaito Isl. June 28, 1949.

This juvenile is supposed to be bottom animal feeder, as an individual of 37 mm long had the stomach full of some Annelida, and 70 mm long one, full of some Sponge.

The juvenile of this species was already reported by Gudger, E. W. and others, but this is the first report concerning the waters around Japan.

ヤリマンボウ *Masturus lanceolatus* (LIÉNARD) はマンボウ科 Molidae に属し、成魚は体長 8 呎、体重 1,200 ポンドにも達する種類で、体高が低く、尾鰭中央部が突出することはマンボウ *Mola mola* (L.) との重要な識別点となつている。Cosmopolitan な種類で太平洋、大西洋、印度洋等の熱帯圏から温帯部にかけて広く分布している。我国近海では 1929 年山口県萩市の魚市場で得られ、日本海西部入口附近の漁獲物と推定せられている——福岡に標本として保存してあつたのを 1931 年 Hubbs¹⁾ が報告している。Gudger²⁾ はこの採集記録は地球上最北のものとし、最南方はアフリカの Cape of Good Hope 近海 ((Lat. 33° 55' S) で、この両地点は緯度上で 77° 55' 即約 4,375 哩の距離に達すると述べている。本種の稚魚期の記載は外国では発表されているが、我国では見当らないから³⁾ こゝに報告する。成魚は特異な形態及び習性をもち分類学上にも問題があるが、諸文献を参照することが出来なかつたので、こゝでは單に形態の記録程度に止めておく。

1. 採集記録

- a. 産地 南大東島 ((Long. 131° 15' E, Lat. 25° 40' N) 南東沖合。
- b. 年月日 1949, VI 28.
- c. 採集法 曳網で漁獲したカマスサハラ *Acanthocybium solandri* が甲板上に吐いたもの 4 尾、同じく消化管内よりとり出したもの 3 尾、計 7 尾。
- d. 測定値 外形の略々完全な標本 4 尾の測定値は第 1 表にあげた。

2. 形態、体長 22.5 mm (第 1 図、第 2 図 1) 体は頗る側扁し、尾部が短いために円形に近く、¹⁾ 恰もマフグ類 *Sphaeroides* の尾柄部を切断してこの後縁に尾鰭をつけ、体を扁平した様な形をしている。背部外廓は大体に於て体軸を直径とした半円形で、背中線には 4 本の棘が突出している。腹部外廓は腹中線に突き出た 3 棘を頂点とした正八辺形の下半部の様な形をしている。

皮膚は中央に骨質の小顆粒をもつた直径 0.1~0.5 mm の平円板状の鱗が鋪石状に並び、恰も Shagreen 状の配列をしているから、表面は粗雑である。側線は認められない。

体の表面には顯著な骨質の棘をもっているが、その数は背中線上に 4、腹中線上に 3、体の両側に 8

(昭和 25 年 1 月 26 日受理) * 南海区水産研究所業績 第 号。

1) Hubbs, C. & Giovannoli, L.: Copeia, 1931 No. 3 135—137.

2) Gudger, E. W.: Proc. Zool. Soc. London, Ser. A, 1937.

3) 岸上鎌吉: 水産学会報 2—(1), 106, 1917. 本種の稚魚らしいか記載が簡単で詳細不明。

第 1 表 魚体測定値 (単位 mm)

標本番号		1	2	3	4
測定部位					
全 長		25.0	62.0	69.0	163.0
体 長		22.0	55.0	60.0	77.5
頭 長		12.1	21.7	22.5	28.0
吻 長 (斜位)		6.0	9.8	10.0	12.2
眼 径		3.3	5.8	6.5	7.3
後 眼 部 (斜位)		4.5	8.2	9.0	11.0
口 裂		2.0	2.4	3.0	3.0
口 幅		3.2	4.0	5.0	5.0
眼 間 隔		6.0	10.5	10.2	12.8
鰓 裂 長		1.9	3.2	3.4	4.5
体 高		26.0	41.0	41.0	47.0
体 幅		8.8	12.0	12.2	15.0
吻端～背鰭起部		20.5	45.0	49.0	64.0
吻端～臀鰭起部		21.0	46.0	52.0	62.0
背 鰭 高		7.0	17.5	20.0	25.5
臀 鰭 高		7.0	19.0	20.5	27.0
胸 鰭 高		5.5	8.5	8.5	10.2
尾鰭糸状部の長さ		10.0	?	32.5	74.0
背 鰭 條 数		19	19	19	19
臀 鰭 條 数		17?	17	18	18
尾 鰭 條 数		7+6+10	7+6+10	8+6+10	7+6+10
備 考	1. 全長は吻端から尾鰭糸状鰭條の先端まで 2. 体長は吻端から尾鰭のつけねまで

第 1 図 体長 22.5 mm

宛である。背中線では前額部にある長さ 3 mm の 1 棘は斜上前方に向い、眼窩後縁上方には 0.5 mm の棘が殆ど痕跡的に、胸鰭上方の棘は最も顯著で長さ約 3 mm で上方に向い、背鰭前方にある長さ 1.0 mm の 1 棘は僅に斜後方に向っている。腹中線の 3 棘は下顎から臀鰭起部の間を略々 4 等分する様に斜前、下、斜後方に向い、その長さは夫々 2.2, 0.5, 0.7 mm である。

体側の棘の長さは背腹両中線のものよりも短く、体軸に沿い不規則な 2 列をなし側方に向っている。上段は眼窩の斜前上方、同斜上後方、第 3 背棘の下方、背鰭起部と鰓孔との略々中央に各 1 本宛、

下段は殆ど痕跡的な 1 棘が口角斜後下方に、眼窩後縁下方と胸鰭基底後端下方には稍々大きなものが、臀鰭起部より略々眼窩長を距る上方には小棘がある。

鰓孔は胸鰭基底前方に接して上下に細く開孔し、その長さは略々鰓孔の直径に等しい。

眼はまるく大きくて、頭長の 1/3.7 で正中線よりもかなり上方に位置し、吻長は後眼部の長さ (斜に測つて) よりも大きい。

口は小さくて体の前端に開き、口裂の長さは吻長の 1/3 である。

背鰭と臀鰭とは体の頗る後方にあり、両鰭の高さは相等しくて高い三角形で体軸に略々直角にのび、後端はいずれも尾鰭前縁と続いている。胸鰭は略々体の中央に位置し斜上後方に向い、鰭條は既に完成している。腹鰭はない。尾鰭は凸形で上下両縁は夫々背鰭臀鰭に接続し、鰭條の末端は鰭膜より突出し、中央部の鰭條は他よりも約 10 mm 伸びて糸状をなしている。即尾鰭條数は $7+6+10=23$ で、上下の 7, 10 は太く短く、中央部の 6 は他よりも細くて皮膚下にあるのが外部からは稍々認め難い。この 6 本の鰭條はのびて糸状になつている。

体色はホルマリン漬標本では背部は暗灰色で、腹側に下るにつれて次第に淡色となり、腹部は淡い灰色になつている。鰓孔は黒色で眼窩の周囲は淡青色である。背鰭と臀鰭鰭條の基底部に近い部分は暗灰色であるが、他は無色に近い。資料入手直後の生鮮時の体色は前記と大差はないが、眼球は帯緑色で眼窩の周囲が青色であつた。

体長 55.0 mm 体は後部がのびて細長くなり且側扁の度が更に大きくなっている。背部外廓は頭頂までは急であるが、それより後方は緩やかに彎曲して尾鰭に達している。腹部外廓は腹中線の3棘は痕

第2図 ヤリマンボウ幼魚
1……22.5 mm, 2……60 mm,
3……77.5 mm (尾鰭を除いた体長)

跡的となつているが、前方の2棘を頂点として多少角ばつている。第2棘より後方はゆるやかな弧状となつている。腹部は漸次に厚みを減じて楔状である。体側の棘は退化して基板を残すだけで何れも痕跡的である。体の表面は粗雑であるが、皮膚の顆粒の大きさは前述の体長 22.5 mm のものと著しい変化は認められない。腹中線は微細な鋸歯状である。尾鰭中部の鰭條は途中から切断している爲に詳細は不明であるが、切断部がかなり太いから末端は更に糸状に延びていたものと推定される。

体長 60 mm (第2図2) 体は後部はのびて前記のものよりも更に細長くなつている、尾鰭中央部の鰭條はのびて体長の3/7になつている。

体長 77.5 mm (第2図3) 体は更に多少細長くなり、尾鰭の形を除いては成魚の形に近づいている。体の棘も僅に痕跡を残すだけである。体の表面は微細な紙鱗状に粗雑であり、皮膚は肥厚し

た感じである。尾鰭は発達し鰭條数は $7+6+10=23$ で中部の6本は細長く糸状にのびて、内1本は略々体長に等しい。他の5本も夫々のびてはいるが、途中より切断した形跡があつて詳細は不明である(第3図)。

3. 消化系 体長 37.0 mm の1個体では、口は体の前端に開き、口裂は小さくて体長の1/15に相当する。上下両唇は厚いが口を覆わず、歯の一部は露出している。両顎歯は夫々1箇で中央に縫合線は認められず、多少突出して嘴状に近い形になつている。口腔は細長く、口蓋及舌上の歯は認められない。咽頭歯は既に形成され、前縁に細い3~5箇の爪状の突起が列生した薄い3枚の掌状

の骨が上下3段に並んでいる。舌は厚い。食道は長くて縦走の皺壁があり噴門部に達している、胃は食餌が充満して拡張し、腹腔中に膨満している。この胃壁は薄く内容物は透視せられる。幽門垂は認められない。小腸は甚だ細長くて、直径約2 mm 長さ約130 mm で、腹腔内で少くとも12回(標本が多少損傷している爲詳細不明)は屈曲してのち直腸に続いている。直腸は小腸よりも稍々太く、長さ約20 mm で3回屈曲して肛門に通ずる、この標本では口から肛門迄の長さは計約171 mm で体長の4.6倍に達する。肝臓は左右両葉に分れているが、不相称形で左葉は約10 mm、右葉は約8 mm で中間に約2.5 mm の小突起がある。

体長 70 mm の魚体では口蓋及舌上には短い棘状突起があつて表面は粗雑である。

4. 食性 体長 37 mm の標本では底棲のゴカイ類 Annelida を飽食し、70 mm の1尾はカイメン類 Sponge の三軸型骨片が多量に胃袋中に認められた。かゝる稚魚期にあつては、沿岸性の底棲動物を食餌とするものと考えられる。

第3図 尾鰭(体長 77.5 mm)